

海外の方言学から学ぶ

—英語圏の最近の研究を中心に—

ダニエル・ロング

1. はじめに

これまで、日本の方言学は海外の方言研究から多くのことを学んできた。本章では、英語圏の最近の研究動向を紹介しながら、日本の方言研究に役立つ研究方法論を考察して行きたい。

2. データ収集

ここで方言の調査法、データ収集法について考えよう。日本の方言研究には英米と異なる側面が見られる。日本では、調査票に沿った面接法が一般的であるが、アメリカやヨーロッパでは自然談話を収集することが多い。アメリカは日本と同様、19世紀末にヨーロッパの方言学から面接調査法を導入したが、歴史の長いヨーロッパ諸国や日本に比べて、米国の地域方言の状況は単調であり、言語地理学の人気はすぐに衰えた。その代わりに、民族や社会階層による方言の違いや、都市における言語変化の有り方に注目する研究が盛んになった。これらの研究では、スタイルシフティングが問題となるため、被調査者に質問し答えてもらうという従来の調査票に沿った面接法は合わなかった。そのため、ラボフなどが模索し、自然発話を収集し、その中から研究対象となっている言語事象の出現数（トークン）を数えるという方法を開発した(Labov 1994, Milroy 1987a)。

日本では以前から藤原与一など、自然発話の収集にこだわり続けて来た研究者もいるが、その分析はトークンを数えるという数量的なものではなく、むしろ質的な分析であった。また、談話分析を目的として自然談話を集める日本の研究者もいるが、これは方言学とは研究目的は異なる。なお、日本の

方言変異は英語のそれとは異なる（例えば、日本は形態素やアクセントに、英語圏は母音や子音に注目することが多い）ので、自然談話資料をベースにした方言学が日本でも一般化するには、さらなる方法論的模索、発展が必要である。

日本に比べて、海外の研究者の間ではデータの共有が盛んになっている。データ共有とは様々な形をとるが、その頂点にたつのは巨大コーパスである。例えば、Linn(1993)は36の資料コレクションをリストアップしている。そのほとんどは伝統方言（地域方言）を対象とした大型プロジェクトによって集められた調査票やフィールドノート、そして現地録音の音声資料（テープ）である。データの共有、およびコーパスに関しては数多くの問題があるが、欧米、特に欧州はコーパスの構築、管理、共同利用において蓄積があるので、日本もこれらの例から学べるのではないかと思われる。

3. 統計処理

海外で発案された数量言語学的処理法やソフトの中にはまだ日本でフルに活かされていないものがある。統計処理プログラムの VARBUL もその一つである。開発された当初、変異規則という理論に基づいていたが、今は複雑な変数の相対的ウェイトを計るためのツールとして広く活用されている (Guy 1993)。

Schneider(1997)はカオス理論 (chaos theory) を、方言の変異と変化の説明に利用できないかと模索し、Girard and Larmouth(1993)は方言境界線の特定にファジィ集合 (fuzzy sets) を応用している。同論文の中で彼らは、重力モデル (gravity model) を使い、2つのコミュニティが行なっている相互作用を通して、その間で方言形式がどのように伝播しているかも探っている。

コンピュータは統計処理だけではなく、地図の作成にも利用されており、方言測定学の研究がヨーロッパをはじめ、西洋で活発になっている。例えば、Schlitz(1997)はルクセンブルク全国の方言地図をハチの巣状で描いた。またCichocki(1997)とその協力者はカナダのフランス語域で、クラスター分析 (cluster analysis) と対応分析 (correspondence analysis) といった多変量解析に基づいた一地域の方言区画図を作成している。方言地図や方言デ

データベースのオンライン化も進んでおり、ロング (1998) では15サイトが紹介されている。

4. 方言地勢学

日本の方言学で盛んな、大都市からその周辺へと広がる「都市方言の伝播」に関する研究、あるいは、話者の年齢差に注目しつつ、1つの言語事象がどこまで伝播しているかを見るグロットグラム調査は、欧米でほとんど行われていない。

しかし、近年、Chambers(1994)の方言地勢学が注目を浴びている。これは方言(特に語彙や文法事項)分布を動態として捉える新しい研究分野である。連続している複数の地点で様々な年齢のインフォーマントのデータをとるという点において、グロットグラムと似ている。図1は、カナダのGolden Horseshoeと呼ばれる米国と接する国境地帯における「運動靴」を表わす諸語形の分布を示している。カナダ従来型のrunning shoesが米国から忍び込んで来るsneakersに脅かされている実態がよく分かる。

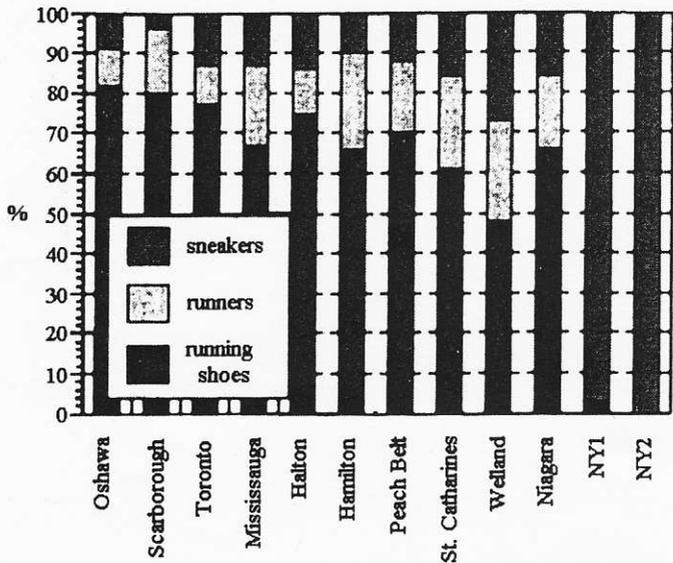


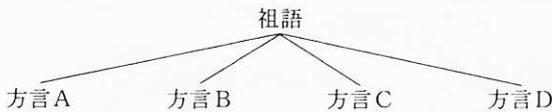
図1 カナダ Golden Horseshoe 地帯における「運動靴」の使用分布

日本で利用されている方法に近いからこそ、日本方言の研究に携わっている我々にとって興味深い。特に氏が発案した「地元指数 (regionality index)」は日本でも応用できそうな方法である (Chambers 2002)。

5. 方言の接触と孤立

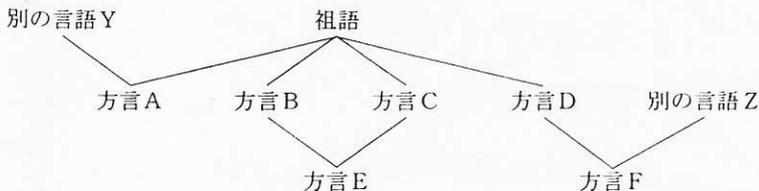
これまでの方言学は、伝統方言を研究対象としたものが主だった。したがって、図2のように、祖語がいかにして現代の諸方言に分岐したということが主な見方であった。

図2 方言的変異を「分岐」として捉える考え方



しかし、北海道方言や江戸方言のように、方言接触によって形成された方言体系はこのモデルだけでは説明がつかなかったのである。これらは図3の「方言E」にあたる。異なった方言が接触し、均一化 (leveling) が起きるとコイネと呼ばれる新しい混合型の方言体系が生まれることがある。コイネ研究の最先端を走るKerwill(1994)はノルウェーの都市における複数の方言の収斂 (convergence) に関する論考を皮切りに、最近では、協力者と共にイギリスのニュータウンで継続的に研究を行ない、複数の方言話者の日常的接触によって形成される新生方言の過程に注目している (Williams and Kerwill 1997)。

図3 方言的変異を「分岐」と「接触」の両面から捉える考え方



一方、方言同士の接触以外にも、方言と他言語との接触が起きることもある。そして、この接触によって新たな言語変種（方言）が生まれることもある（Poplack 1993）。近年は、アメリカ国内におけるハンガリー語、ドイツ語、フィンランド語など、英語以外の言語コミュニティに関する研究も行なわれている。今まで、こうした現象は「言語接触論」の枠組みの中でしか扱われなかったが、今はむしろ方言学の課題として注目されており、「インディアナ州方言のハンガリー語」のように、「在外方言」が従来の「国内方言」と比較対照される研究が増えている。これらは図3の「方言F」に当たる現象である。日本で生活する（あるいは「日本語を使って生活する」）他民族の集団が使う言語変種も注目され始めている。現在、これは彼らのバイリンガリズムや「外国なまり」（あるいは文法的特徴）の記述に止まっているが、将来、彼らが使っている特徴ある日本語が民族方言として確立する可能性も捨て切れない。

そして近代において、外国語との接触によって生まれた新生方言があるということは、過去にもこうした方言が形成された可能性が出てくる。つまり、図3の「方言A」のようなものは現在でも我々のまわりで使われているかもしれない。日本では、現在の東北方言がかつての大和言葉とアイヌ語との接触によって生じた可能性をめぐって、その昔、金田一京助が（否定的な）論文を発表している。しかし、方言学をはじめ、この数十年の間、言語学は著しい発展を遂げているので、最新の言語理論を武器にこうした問題を（再）検討する必要があるだろう。

接触とは逆の現象として、方言が長年にわたって孤立した場合にどのような変化が見られるかという新しい研究分野も Trudgill とその協力者を中心に確立しつつある。さらに、複数の言語変種が接触した後に孤立することによって、新たな言語体系がどのように結晶し、熟成するかという研究も進められている。

特に、これまであまり言及されてこなかったニュージーランド英語の形成課程が近年注目を浴びている（Trudgill 1999）。その他、大西洋フォークランド諸島やトリスタン・ダ・クーニャ島、及び小笠原諸島などの英語変種に見られる特徴や共通点を検証することにより、それぞれの歴史的形成課程を明らかにし（Trudgill et al. 2002）、地球レベルで英語諸方言の系統論的關係を把握する試みが進められている（Trudgill 2002）。

6. 社会階級方言とネットワーク理論

世界の言語を見た場合、地理的な変異（つまり、地域方言）がない言語体系はほとんどないと思われている。それに比べて、「社会方言」という現象は、欧米のような工業化や都市化が進んだ資本主義社会で主として見られる。同じように近代化が進んだ日本において、社会方言がないことは興味深い。

日本各地の方言には、社会的地位を反映する言語的特徴も報告されている。しかし、現代においてそのほとんどは、親族名称や（使用される）待遇表現など、語彙体系のごく一部の相違に止まっており、欧米の「社会方言」と根本的には異なる（ロング1999）。日本の方言学界においてもラボフの方言使用と社会階級との関係を指摘した書物やその方法論、理論は広く知られている（Labov 1994）が、社会階級と関連づける部分は日本では当てはまらないのである。

一方、どの人間社会にも当てはまると言われているのは、ミルロイが広めた社会ネットワーク理論である。ラボフは労働階級の話者は伝統方言を忠実に守り、中流階級は変化（標準語化など）に敏感だと論じている。ミルロイはそうした一般的事実を反論してはいない。ただ、その理由は経済的要因そのものにあるのではなく、それと関係している社会ネットワークの違いにあると述べている。簡単に言えば、中流階級の多くの話者は色々な人との付き合いを持つ（ネットワークが広く、密度が薄い）が、労働階級の多くは同じ限られたメンバーといっしょに働き、遊び、暮らす（よって狭くて密度の濃いネットワークを持つ）。さらに、後者は自らの使用言語に対して保守的になるため、標準語化しにくいということも分かっている（Milroy 1987b）。

7. 方言認知

日本でも、外国でも方言がある程度均一化が進み、標準語化している一方で、何年たっても100%標準語化しないという不思議な現象も見られる。そして、ある側面においては「脱標準語化」とも言える現象が見られる（東京の新方言など）。地域によって、あるいは性別や社会集団によってその標準語化のスピードは異なっている。これらの原因は言語意識にあると思われる。

「ことばの社会進学」と呼ばれる学問はかつて、*matched guise* という実験方法や「順応理論」(*accommodation theory*)を広めた。最近、この分野の現状を網羅するハンドブックが出ている(Robinson and Giles 2001)。言語意識の追究で、これと並ぶ分野は D. Preston が提唱した「認知方言学」(*perceptual dialectology*)である。ここでも、多数の言語を対象に行なわれた認知方言学の研究成果をまとめたハンドブックが出ているのである(Preston 1999; Preston and Long *fc*)。日本の「方言境界線意識」をめぐる一連の研究を参考にしながら形成された認知方言学は、逆輸入の形でこれからの日本の方言研究者にも役立つであろう。

8. コミュニティに還元する方言研究

日本では、方言が消滅しているのではないかということがたびたび問題にされるが、アメリカでは、こうした危機意識はまだ薄いようである。日本語の方言は千数百年の歴史を持つのに対し、アメリカの方言は歴史が浅い。それだけに方言をどれほど貴重で価値のあるものとして感覚が違うかもしれない。

それでも、世界中で「絶滅の危機に瀕した言語」が懸念される中で、近年、アメリカにも「危機に瀕した方言」があると指摘する声が上がっている(Wolfram 2000)。具体的には、ウルフラムとその協力者が調査を続けているアメリカ東海岸沖合いにあるオクラコーク島の方言がその1つである。この島の方言は独自の改新形も見せているが、英語の歴史が浅いアメリカの中でも比較的歴史のある方言であるため、イギリス英語に近い特徴を保っている。

フィールドワークを行っている我々は、対象コミュニティにできる限り研究成果を還元すべきであるとウルフラムは訴えている。ラボフ(Labov)は1982年に「誤解修正の原理」(*Principle of Error Correction*)を提唱している。これはつまり、「言語に関する誤解を正すべし」ということである。ラボフらによる研究によって、「黒人英語を使っている子供は言語が欠乏している」という神話が打ち破られたことはこれに当たる。同じ論文で、「データ提供者に恩義を負うべし」という「恩義の原理」(*Principle of Debt Incurred*)を提唱している。正すべき誤解が無くても、研究者は言語コミュニティからデータを収集している以上、その人々には恩義がある、という考

え方である。

ウルフラムはこれをさらに発展させ、研究成果を活かした形での恩返しがどのような形態で行なわれるべきかについて述べている。「言語学的恩返しの原理」(Principle of Linguistic Gratuity) である(Wolfram 1993)。これによると、「ある言語社会から言語データを収集している研究者は、研究成果を活かした形での恩返しができる方法を積極的に追求すべし」である(Wolfram 1997: 6)。つまり、フィールドワークを行なっている我々は研究対象者に対して、単に贈り物をしたりするだけではなく、言語と何らかの関係があるかたちで、研究成果そのものを還元すべきであるという考え方である。日本でも方言辞典の出版、住民向けの講演会、方言大会の支援、テレビ出演、子供向けの本や教材作りなど様々なかたちで、こうした「恩返し」が行なわれていることは喜ばしいことである。一方、ウルフラムの研究チームが様々な形で一般人に対して言語的な「布教活動」を試みている。例えば、(1) 一般人向けの方言解説書(氏が出している言語学者向けの専門書や研究論文とは別にコミュニティ住民や訪れる観光客に読んでもらえる本)を出版した。(2) 島の中学2年生が社会科(国語科ではなく)で使う教科書「方言とオクラコーク弁」を作り、地元のことばの特徴を概説しながら、人の話し方を蔑視する方言差別や方言コンプレックスの解消を図っている。(3) 地元方言に関するドキュメンタリービデオを製作し、放送した。(4) 地元方言を収録し、編集し、CDを製作した。(5) 観光客向けの俚言葉や「地元方言を救おう!」と書いたTシャツをデザインした。

さて、危機に瀕した方言を保護することが、方言学者の力だけでは不可能な場合にどうすれば良からうか。最悪の場合でも、方言の「死に方」そのものを研究対象にすることが可能である。欧米では「言語死」の研究が進歩しているが、その最大の成果は、言語が消滅しかかっている過程において、様々な言語現象(文法事項の変化など)が見られるという点にある。こうした理論を方言の死滅にも当てはめられるかどうか検証する必要がある。

9. 方言区画論

ラボフとその弟子たちは社会方言学だけをやっているように思われがちだが、近年はむしろ地理的分布にも興味があるようです。その研究成果の結集

と言えるのは、現在作成中の *Atlas of North American English* (北米英語言語地図集) である。書物は近刊 (Labov 他 *fc*) となっているが、数年前からその発展の過程をインターネットで随時公開している。当初は *The Phonological Atlas of North America* (北米音韻論的地図集) という仮題だったが、現在も音韻が中心だが、語彙や文法事項の分布に関する章やこれらと音韻論的特徴との分布を比較した部分も加わった。

この方言地図集の画期的なところは、音韻体系の分布だけではなく、起こりつつある音韻変化を動的に捉え、音素の融合や連鎖推移 (chain shift) という現象そのものの地理的分布を地図化し、分析している点にある。この研究の結論は一枚の地図にまとめられている (図4)。

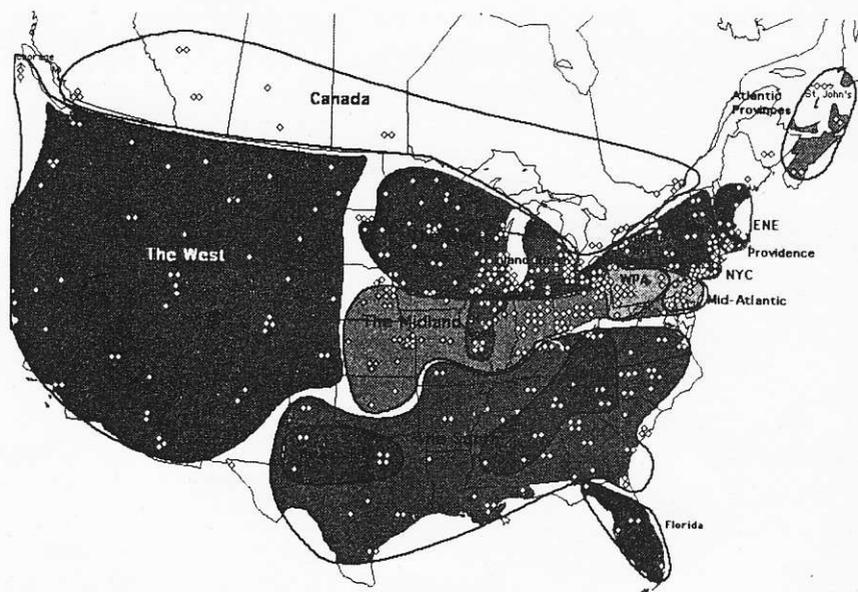


図4 音韻論的特徴による北米英語の方言区画

ラボフらによる北米英語の方言区画はいくつかの層が重なってできている(表1)。その結果大分類、中分類、小分類のように様々な区切り方が考えられることが分かる。中分類のレベルで、最も広い分布を持つ方言区域は「西部方言」、「北部諸方言」、「中部諸方言」、「南部諸方言」、「カナダ方言」であるが、複数の狭域の方言(東海岸)以外にも、どこの方言区域にも属しないものや、二つの方言特徴を併せ持っている移行方言の地点も見られる。

表1：ラボフらによる北米英語の方言区画

北部 (North)	r 無しの東部 方言	プロビデンス地区 (Providence)	
		東ニューイングランド (ENE)	
		ニューヨーク市 (NYC)	
	r 有りの北部 方言	北部内陸部 Inland North	
西ニューイングランド (WNE)			
セントルイス地区 (St. Louis)			
その他の北部方言・北部中央 (North Central)			
音韻融合方言		カナダ (Canada)	
		大西洋諸州 (Atlantic Provinces)	
		西部 (The West)	
非北部	中部 (The Midland)		ペンシルベニア西部 (WPA)
			大西洋中部 (Mid-Atlantic)
			(その他の中部方言)
	南東部 (Southeast)	南部 (The South)	南部内陸部 (Inland South)
			南部的テキサス (Texas South)
		(その他の南部方言)	
		フロリダ (Florida)	
移行方言 (Transitional Dialects) 41地点			
その他の方言			

日本で方言区画論が(井上史雄の研究を除いて)数十年間ほとんど冬眠状態にあったのに、これまで方言区画に関心を示さなかったアメリカからこうした動向が見られるのは意外である。今後、こうした研究から生まれた新しい理論や方法論が日本の方言学を刺激し、その復活となれば、日本方言区画論にはさらに面白い進展が見られるかもしれない。

10. 終わりに

日本の方言研究は独自のルーツを持ちながらも外国の方言研究方法や理論を積極的に取り入れ、吸収するという歴史がある。上田万年、柳田国男、藤原与一、柴田武といった日本方言学の巨匠はいずれも海外（特に欧州）の言語学の影響を受けている。また、W. A. グロータースは、ヨーロッパで身につけた方言学理論を中国で活用してから、それを日本で応用し、LAJ（日本言語地図）やGAJ（方言文法全国地図）などの成果に貢献している。

20世紀の日本において方言学は、伝統的な地域言語の記述や歴史的再構築を中心とする学問から、言語運用において様々な変種が担う役割や変化そのもののメカニズムを追い求める学問へと発展していった。これもまた、日本独自の変化ではなく、世界各地で起きた研究対象の起動修正なのである。新しい世紀が始まった現在、日本の方言研究に携わっている我々が、英語圏のみならず、世界諸言語のバリエーションを分析する研究者と情報交換をしながら、方言学の新たな応用法を追究しなければならないであろう。

【参考文献】

- Cichocki, Wladyslaw. 1997. "Atlas Linguistique du Vocabulaire Maritime Acadien: a final progress report." In A. R. Thomas (ed.) 1997: 109-119.
- Chambers, Jack. 1994. "An introduction to Dialect Topography." *English World-Wide* 15: 35-53.
- Chambers, Jack. 2002. "Regionality as an Independent Variable: Interlopers as Agents of Linguistic Change." *Sociolinguistics* 6: 117-130.
- Girard, Dennis, and Donald Larmouth. 1993. "Some applications of mathematical and statistical models in dialect geography." In D. Preston (ed.) 1993b, 107-132.
- Guy, Gregory. 1993. "The quantitative analysis of linguistic variation." In D. Preston (ed.) 1993b, 223-249.
- Kerswill, Paul. 1994. *Dialects converging: rural speech in urban Norway*. Oxford: Clarendon.
- Labov, William. 1982. "Objectivity and commitment in linguistic science:

- the case of Black English." *Language in Society* 11:165-202.
- Labov, William. 1994. *Principles of Linguistic Change* Blackwell.
- Labov, William, Sharon Ash and Charles Boberg. forthcoming. *Atlas of North American English*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Linn, Michael. 1993. "Appendix: Resources for Research." In D. Preston (ed.) 1993.
- Milroy, Lesley. 1987a. *Observing and Analysing Natural Language*. Blackwell 太田一郎, 陣内正敬, 宮治弘明, 松田謙次郎, ダニエル・ロング (翻訳, 2000) 『生きたことばをつかまえる一言語変異の観察と分析』松柏社
- Milroy, Lesley. 1987b. *Language and Social Networks*, 2nd ed. Blackwell.
- Pederson, Lee 1993. "An approach to linguistic geography: *The Linguistic Atlas of the Gulf States*." In D. Preston (ed.) 1993b, 31-92.
- Poplack, Shana. 1997. "Variation theory and language contact." In Preston 1993: 252-286.
- Preston, Dennis R. (ed.) 1993. *American Dialect Research*. Amsterdam: John Benjamins.
- Preston, Dennis R. (ed.) 1999. *Handbook of Perceptual Dialectology*. Amsterdam: John Benjamins.
- Preston, Dennis R. and Daniel Long. (eds.) forthcoming. *Handbook of Perceptual Dialectology*, vol. 2. Amsterdam: John Benjamins.
- Robinson, Peter and Howard Giles. (eds.) 2001. *The New Handbook of Language and Social Psychology*. John Wiley & Sons.
- Schneider, Edgar. 1997. "Chaos Theory as a model for dialect variability and change?" In A. R. Thomas (ed.) 1997: 22-36
- Thomas, Alan R. (ed.) 1997. *Issues and Methods in Dialectology*. University of Wales.
- Trudgill, Peter. 1999. "A window on the past: "colonial lag" and New Zealand evidence for the phonology of 19th century English." *American Speech* 74.3: 227-239.
- Trudgill, Peter. 2002. "The History of the Lesser-Known Varieties of English" in Watts, Richard and Peter Trudgill (Eds.) *Alternative Histories of the English Language*. Routledge.
- Trudgill, Peter, Daniel Schreier, Daniel Long, Jeffrey P. Williams. to appear 2002. "On the reversibility of mergers: /w/, /v/ and evidence

from lesser-known Englishes" *Folia Linguistica Historica* 23.

Williams, Ann and Paul Kerswill. 1997. "Investigating dialect change in an English new town." In Thomas 1997: 46-54.

Wolfram, Walt. 2000. "Endangered dialects and social commitment." In Joy Peyton, Peg Griffin, Walt Wolfram, and Ralph W. Fasold (eds.), *Language in Action: New Studies of Language in Society*. Cresshill: Hampton Press. 19-39.

Wolfram, Walt. 1993. "Ethical considerations in language awareness programs." *Issues in Applied Linguistics* 4: 225-255.

ロング・ダニエル (1998) 「方言のデータベース化の課題とその現状」『人文学と情報処理』18: 81-86

ロング・ダニエル (1999) 「米国の地域方言と社会方言」『日本語学』18.13: 271-278

(Daniel Long 東京都立大学助教授)